

九段中等教育学校における色彩指導の変遷

～三原色をどのように指導してきたか～

千代田区立九段中等教育学校

小 野
落 合

千代田区立九段中等教育学校は千代田区立の中高一貫校である。高校の研究会では、中学校で行っているような色の三原色についての題材は、あまり行われていないが、今回の発表の趣旨は、授業作りの変遷に着目した発表である。

○三原色を使った回転木版画

中学校一年生の授業で、色の混色についての理解を深めるための題材として、回転木版画を行った。

ベニヤで作った正方形の版を使って、三色分の版を回転させ重ねて刷っていく事で、重なった部分の色の変化を理解するという授業である。

毎年行ったが、少しずつ材料と方法を変化させてきた。

○ひとり分の材料

2007年度の実践

版 : 20cm×20cmのラワンベニヤ
印刷用紙: 三ヶ月分のカレンダーを印刷した四つ切り画用紙4枚
イ ン ク: 版画用水性インク

2008年度の授業

版 : 10cm×10cmのシナベニヤ
印刷用紙: ハガキサイズの版画用紙3枚
イ ン ク: 版画用水性インク

2009年度の授業

版 : 10cm×10cmのシナベニヤ
印刷用紙: ハガキサイズの版画用紙3枚
イ ン ク: 三原色カラー

2010年度の授業

版 : 10cm×10cmのスチロール板
印刷用紙: ハガキサイズの版画用紙3枚
イ ン ク: 三原色カラーにアクアメディウム

○版の材料を変えた理由

当初は、20cm四方のベニヤ板を使い版を作ったが、40人一斉授業の中で、10台の糸鋸を使用して木を切り抜く作業は、順番を待たないといけないうことや、使い方に慣れていない生徒が頻繁に刃を折るなど、版を作る事に時間がとられてしまった。糸鋸での制作を経験させるメリットもあるが、印刷する際に、インクの色を変えるたびに、一度水で洗い、その後、水分を拭き取ってから、次の色をつけるため、三原色を学ぶための授業としては、時間がかかりすぎた。次年度は、サイズを縮小し、ラワンベニヤからシナベニヤに変更して、おこなうことで、版作りの時間やインクを落とす時の作業時間も含めた印刷時間が短くなり、全体的な制作時間を短縮することができた。一方、切り抜く際の抽象的な形が複雑な形を作りにくくなってしまった部分もある。

その後、版をスチロール版にした事で、デザインした形をカッターで切り抜いて作る事が出来るようになり、最初の頃より版作りの時間が4分の1に短縮された。

○印刷用紙の変更について

はじめに使用していたのは、四つ切りの画用紙である。画用紙の下方に三ヶ月分のカレンダーを印刷し、友達と交換することで、一冊のカレンダーを作った。しかし、三原色×4枚の印刷ため、印刷に時間がかかりすぎ、

次年度からは、はがきサイズに変更したことで、時間が短縮された。また、印刷後は、お世話になった人への手紙を書く作品とした。

○インクの変更について

印刷用のインクは、初め、水性の版画用インクを使用した。そのインクで重ねて印刷した場合、印刷する色や分量によって、色の重なり合いがうまく表現できないことがあった。様々な色が三原色で表現できることを理解することが、授業の目標であることを考え、マゼンタ、シアン、イエローの三原色カラーを利用することにした。市販されている三原色カラーの絵具をそのままでは、版画に適さなかったため、アクアメディウムを混ぜ、透明度と粘度を調合した。そのため、重ねて刷った時に色の重なり合いが分かりやすくなるようになった。調合したインクは、はちみつ用のボトルに入れ、生徒が印刷する際に、必要な分量だけ、使用できるように工夫をした。

○まとめ

この題材の授業の目的は、三原色を重ねて印刷することで様々な色が表現できることを理解するということである。その目的を達成するために、最短の時間で、より理解を深めるために、どのような材料や、どのような方法が適しているかを考え、試行錯誤を繰り返し授業改善を行った。

はがきサイズで印刷した授業では、自分の作った作品をお世話になった祖父や祖母、部活の先生などに自分の感謝の思いを込めたメッセージを添えて渡すことで、送られた方から喜ばれ、自分の制作した美術の作品が人を喜ばせることにもなるということを実感させることにもなった。

同じ題材を数年に渡って取り組むことで、授業の目的を達成するためにどのような事が

必要であり、年間計画での位置づけの中で、最適な時間数や授業計画の組み立てについて考えることができた。

生徒が印刷をした自分の作品に愛着を持たせるために、失敗を少なくし満足感を感じられるように心がけた。それぞれの学年集団の雰囲気や傾向に合わせて、抽象画についての話を加えた学年や、展示するためのフレームを作らせたこともある。そのような材料や方法の改善は、材料や造形の知識を深めることにもなり、他の題材に取り組む際にも役立っている。

また、このような授業改善をスムーズに進められたのは、チームティーチングにより複数の教員で授業に取り組めたというところが大きい。授業ごとに、改善点を話し合い、生徒の学びにとって、最適な授業を作るためにどうしたらよいかを、日々話し合える環境があったからである。

都立高校においては、美術科の専任教員が一人であることが多いので、自主的な研修の他、研究会に積極的に参加し、お互いの授業を研究し情報を共有していくことが大事である。その中で、授業を見せ合い、様々な人の意見を聞くことで、一人では気づけなかったことに気づくことができると考える。

東京都高等学校美術工芸研究会がそのような場として発展して欲しいと願っている。

